

## V 第7期子どもの権利委員会を振り返って

### 佐々木 光明 委員長

きかん気あふれる5歳になる子が、だっこで話をしながらそのまま眠ってしまった。その子のすべての重さが伝わってくる。いのちのすべてを委ねて眠る。安心できるとき子どもは、まるのままの自分で向き合うのだろう。幼児期に限らず成長期のなかでおとなとの関わりが、子どもが何かを信頼していく力を育てていくような気がします。子どもの権利尊重の基礎になるものではないでしょうか。コロナ禍では、その関わりのありようをあらためて考える機会になりました。

コロナ禍で非日常のなかに置かれた子どもやおとなの実情をどう見るのか、今期の諮問は、いっそう丁寧に把握する必要性を意識する機会にもなった気がします。それぞれの地域や子どもとの関わりを持つ委員さん、専門性を持つ委員さんそれぞれの敏感な感性は、委員会活動や議論の内容をいっそう深めてくれるものでした。多くの気づきを得る機会でもありましたが、それが「答申」に現れているといいのですが…。個性的で素敵な委員の方々に、感謝でいっぱいです。

### 林 大介 副委員長

アンケート調査だけでは気づけないことが、対話を通して明らかになったのは評価できるが、その声がすべてではない。まだまだ、気づけていない、聴くことのできていない子どもの声があるのも、事実である。

条例ができたのは20年前であるが、この20年、社会情勢が大きく変容するなかで、子どもを取り巻く環境も変化し続けている。条例ができたことで子どもの権利保障がすすんだのは事実であるが、条例の認知度含めて、まだまだ課題は山積している。

この20年間で、子ども自身が「自分の思っていること、考えていることを、評価やおとな・教職員の目を気にすることなく、安心して話せる場所・環境」を、どれだけ生み出すことができたのか。「安心して話せる場所・環境」とするためには、どのような取り組みが必要なのか。おとな・教職員は、そのための努力をどれだけ積み重ねてきたのか。常に「子ども」が成長する中、日々の丁寧な取り組みの積み重ねの必要性を、改めて実感している。

子どもが日常を過ごしている学校や地域の中で、民主主義とは何かを考え、子どもの声が反映された学校運営、行政施策の運営がされているかどうか。家庭において、安心して生活できているかどうか。子ども自身が、自分の権利を自覚し、権利行使できる社会を、求め続けることが不可欠である。

川崎市子どもの権利委員会に、第5期から第7期にかけての9年間、委員を務めさせていただいた。この間、特に「対話部会」を中心とした、子どもの意見表明・参加を中心に取り組んできた。こうした貴重な機会を提供していただけたことに感謝したい。そしてまた、ここでの経験を、川崎市のみならず、国内各地の子どもの権利保障の促進につなげていきたい。

9年間、ありがとうございました。

### 五十嵐 努 委員

前期に続き子どもの権利委員会市民委員として参加させて頂きました。

現在、(川崎市) 地域教育会議・こども食堂・こども文化センター運営委員・和太鼓の出前授業などを通して学校に出入りしている者として、子どもの権利委員会に情報提供できるのではと参加して

きました。

今期、条例制定 20 周年の節目に川崎で「子どもの権利条約フォーラム」が開催されたこともあり、「子どもを保護する対象としてだけでなく、権利の主体として見ていく」ことを委員会の中で学ばせて頂きました。

「子どもを権利の主体として」見る視点は、社会的には広がってきているからこそ、子どもの権利条例を持つ川崎市として一層の検証・改善が求められていると感じています。

### 加藤 悦雄 委員

条例制定 20 年目の諮問内容「子どもの実生活において条例がどう生かされているのか、子ども自身の立場から検証する」とおして、子どもの権利に関するたいへん本質的な課題と向き合う機会を与えられた。

活動に加わり、印象に残っている点は数多くあるが、子どもとの対話において、「子どもの権利が大切にされている居場所とつながり、人生が変わったと話してくれた子どもが複数名いたこと」、歴代委員との意見交換において、「条例があることで可能となった成果を確認することの大切さと、成果の中にこそ課題を克服する手がかりが含まれている」という話に触れることができた点などである。

そのうえで委員会メンバーとの実りある議論をとおして、提言内容に盛り込むことができたのではないか。さらに個人的にも、子どもが権利の主体として生きていくことができるように、縁の下の力持ちの一員として行動していくうえでの動機づけも与えられたと感じている。

### 金子 あかね 委員

委員会の活動の中で私が特に印象深かったのは、実態・意識調査での子どもたちとの「対話」です。大切なことをたくさん教えてもらいました。子どもたちとの対話の中で、私自身が子どもの頃に大人が勝手に決めたルールに従わせられる不条理や、自由のなさ、理不尽な大人の要求に納得できず反発していたことを思い出しました。しかし今の子どもたちは、反抗するでも怒るでもなく、静かに諦めているようにも見えます。

対話での子どもたちの声を聞き（語られることのない子どもたちの声にも思いを馳せながら）子どもたち一人ひとりの思いに、一人の大人としてどう応えていけばよいのかを今もずっと考え続けています。

コロナ禍が直撃した第 7 期の活動でしたが、2021（令和 3）年に施行から 20 年を迎えた条例の検証の中で、条例制定に関わった方々や歴代委員のお話をうかがい、改めて条例の意義と課題を確認できたことは、とても貴重な経験でした。いつも和やかで活発な意見交換の場をつくってくださった佐々木委員長、それぞれの専門分野・ご活動の視点からたくさんの気づきをくださった林副委員長はじめ委員のみなさま、そして川崎市子どもの権利委員会事務局のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。

### 川崎 眞喜子 委員

権利委員会に携わらせていただきましたこの3年間はコロナ禍真っ只中。初期の頃は対面での会合でしたので何とか必死で理解しようと努力いたしました。しかし、SNS(Zoom)での開催とかが続きました時には電波状況が不安定であったりと、中々上手く聞き取れず、往生致しました。

委員会が発足して20周年と伺いました。しかし、市民への周知度は何ともおぼつかない。子どもたちがおかれて居る状況には本当に格差があり過ぎて、どの様にしたら本当に必要な方達に援助の手を差し伸べることが出来るのか？

助け合いの精神、個々にはお有りだと思うのですが…、ピンポイントでとなると中々思う様に進まない現状が見て取れる。そんな中、各方面から選出された委員で構成されて居るこの委員会が皆で智慧を出し合って前進して行かれることを切に願っています。

### 霜倉 博文 委員

第7期川崎市子どもの権利委員会の委員として、3年間活動させていただきました。条例施行20年の節目が任期中であったこともあり、貴重な経験ができたことに感謝しています。子どもの権利に関しては委員になる前も意識していましたが、委員会での議論、子どもたちとの対話、条例策定に関わった方や歴代の委員の方との対話等、改めて子どもの権利について学びを深める機会ともなりました。

印象深かったのは、子どもとの対話の中で、「大人が安心して生活できていないと、子どもも安心して生活できない」という発言でした。子どもの権利を保障していくために、大人の権利も大切にしていって視点も必要だと感じました。

委員長を中心に、第7期委員の方々、事務局職員と活動を共にさせていただいたことを施設運営の実践に活かしていきたいと思います。

### 鈴木 秀洋 委員

権利委員会委員は誰のために何をすべきなのか、私はこの委員会でどのような役割を果たすべきなのか。毎回ベクトルを自分に向け続けた本期委員会期間であった。

行政実務経験があり、かつ、自治体で子ども部局の責任者をやっていた自分こそが、行政の課題を具体的に指摘できるはずであるし、多くの子どもの声を聞いてきた自分こそが子どもの代弁者として子ども視点で発言し続けなくてはならないはずである。

果たして、私が初めてこの委員会の委員になったときと比べて、川崎市は本気で子どもファーストな制度改善を行っているのであろうか。子どもの権利主体性の尊重は一步でも進んだのであろうか。自分がこの委員会委員となった意味はあったのであろうか。もし、子どもの笑顔を増やせていないとしたら、私は、やはりこの委員を辞すべきではないか、そう考えて、本期の活動を振り返っている。

### 出口 早百合 委員

第6期7期川崎市子どもの権利委員会の委員を3期務めさせていただき自分の地域外の子も達と会話する機会が増えとても有意義でした。

昨今の子も達は人に迷惑をかけないことが良いことと思って行動しなかつたり、失敗したくな

いので行動できなかつたりと消極的になっている気がします。失敗しても大丈夫、迷惑かけられても全然平気という態度で、子どもたちが頼れる地域住民の大人として子どもたちを見守ってあげたいと思います。人に迷惑かけてもいい。善かれと思ってしたことなら。ごめんなさい、ありがとうがちゃんとと言えるなら。失敗を怖がらなくていい、いい経験になるから。どんどん大人に頼りなさい。大人に迷惑かけなさい。川崎市にはそんなので怒るちっぽけな大人はいない。と大手を振って言える川崎市にしたいです。理想ですけど。

## 畑 福生 委員

まず、条例検証部会の部会長として活動できたことが大きいです。検証期間等の関係で制限もありましたが、条例施行20周年の節目に改めて条例の文言に立ち返り、検証ができたことは幸いでした。この検証が次回の検証につながることを期待しています。

また、総合型地域スポーツクラブを利用する子どもや子ども会議に参加する子どもからヒアリングできたことも貴重な機会となりました。ヒアリングを通じて子どもの置かれている状況について改めて思い知りましたし、子どもたちの意見にハッとさせられることが多かったです。生の声を聴くことの重要性を改めて実感いたしました。コロナ禍の中困難も多くありましたが、このような非常事態の中でこそ見ることができる側面もあったかと思います。第7期委員を務められたことを誇りに思います。